

2025年度（令和7年度）学校評価自己評価表

幸千中学校区

校番15

福山市立 御幸 小学校

最終更新日

2026年（令和8年）2月19日

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、
日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	思考力・創造力	表現力	思いやり	能動的市民性
○ボランティア活動や交流館との連携など、地域との関わり（CSの取組）を通して、子どもたちが成長している。 ●保護者・地域住民への積極的な情報発信を行い、CSの取組を知ってもらうとともに、地域連携をさらに深めて欲しい。	○地域行事やボランティア活動に主体的に参加する児童・生徒は年々増えており、それが児童・生徒の自信や地域への愛着につながっている。 ●中学校区として不登校数はまだ多い。 ●体力テストにおいて、県の平均値以上の項目がまだ少ない。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	○主体的に学び よく考える児童生徒 ○思いやりのある児童生徒	○自分なりに表現し伝え合う児童生徒 ○人や社会に貢献しようとする児童生徒		
		中学校区として統一した取組等	○住み続けられる町づくりを考えることを目的にした学習を核に各教科と関連づけたカリキュラムを実施することで、めざす子ども像に迫る取組を行う。 ○生徒の実態を細やかに分析し、生徒のつまずきの要因に対応した指導と支援を行う。			

Ⅲ 自 校

ミッション		育成する力 資質・能力	思考力・創造力	表現力	思いやり	能動的市民性
一人一人が自立し、社会に貢献できる子どもの育成		めざす 子ども像	自ら問いを見 つけ、見通しを 持って、調べた り考えたりしな がら解決するこ とができる。	目的や理由・根 拠をとらえ、相手 意識を持ち、自分 の考えを伝えるこ とができる。	お互いの立場や 意見を尊重し、相 手も自分も大切に し、協働しながら 生活を高めること ができる。	身の回りから 課題を見つけ、学 校生活をよりよ くするために、仲 間と協力して解 決することがで きる。
学校教育目標		めざす 子ども像	自ら問いを見 つけ、見通しを 持って、調べた り考えたりしな がら解決するこ とができる。	目的や理由・根 拠をとらえ、相手 意識を持ち、自分 の考えを伝えるこ とができる。	お互いの立場や 意見を尊重し、相 手も自分も大切に し、協働しながら 生活を高めること ができる。	身の回りから 課題を見つけ、学 校生活をよりよ くするために、仲 間と協力して解 決することがで きる。
自ら考え 行動し 挑戦する児童の育成 自分の成長のために 人の役に立つために						
現 状		研究	教科等	特別活動&生活科・総合的な学習の時間を中心に		
＜児童生徒＞ ・「授業を通して考えることで、分からないことが分かるようになったり考えが深まったりした。」92%…落ち着いて授業に向かう環境ができています。 ・教師や大人の指示をよく聞いて動くことができる一方、自分から気づいて考え行動する力が十分ではない。 ・長期欠席児童は、昨年度35名。 ＜授業＞ ・児童会が中心となり、学校行事などで相手意識を持ち、アイデア豊かに自ら考え挑戦していた。 ・一昨年度「学級の友達との話し合い活動を通して自分の考えを広げることができた」85% 昨年度…「委員会や係活動などで自分の役割を果たすことができた。」委員会→93.0%、係活動→95.6%…特別活動を中心に様々な教科で話し合い活動や児童が活躍する場を仕組んだ。			主題・ 内容等	自己決定し、協働的に問題解決する子どもの育成 ～「学びのフレーム」と「ゴールフレーズ」を活かして～		
		めざす授業の姿	児童自らが身の回りから課題を見つけ、行動や取組を自己決定し、友達と協働的に問題解決をして学びを深める授業。			

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立御幸小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力 _セ 達 成 _セ 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 _セ 達 成 _セ 評価	総合 評価	改善方策		
3	自ら学びに向 かう力、学び続 ける力を育成 する。	★	継 続	児童が自ら学 習活動における 課題を見出し、協 働的に問題解決 する学習を通し て、学びに向かう 力と基礎学力の 向上を図る。	特別活動や生 活科・総合的な学 習の時間を中心 に、研究授業や校 内研修を行い、授 業力向上を図る。 研究主題をも とに、日々の教材 研究を行い、児童 の実態を把握し、 一人一人の学び に応じた学習活 動を工夫する。	・児童アンケート児 童アンケート「授業 を通して考えること で、分からないこと が分かるようになって きた。」「授業を通 して考えることで、 分からないことが分 かるようになったり 考えが深まった。」「 85%以上 ・学期末到達率(知 識・技能)80点以上 (国・算) 80%以上	□日々の授業に活か すことができるよう に、校内研修を 体験型にしたり教 員の困り感をもと に組み立てたりし て、授業力向上を 図ることで、児童 アンケート「授業 を通して考えるこ とで、分からない ことが分かるよう になったり考えが 深まった。」「肯定 的評価は91.2%で あった。 □教材研究や見取 りを大切にした授業 や、百マス計算や 漢字小テストなど 基礎学力を定着さ せるためのチャレ ンジタイムを行っ たが、学期末到達 率(知識・技能)80 点以上の割合は、 国語62%、算数 62%であった。	3	2	○1学期のチャレ ンジタイムの内容を 振り返り、2学期 は、修正して取組 を進める。また、 学力に課題がある 学年は、学力補充 を行うことで、基 礎学力の向上を図 る。 ○授業づくりPFを 効果的に活用して 授業改善が進めら れるように、取組 の結果を日々振り 返り、共有できる ように、職員同士 で交流する機会や 仕組みをつくる。	□授業づくりポート フォリオと研究授業 を連動させること で、全職員で学力 向上に向けて、話し 合い・学び合うこと で授業改善・授 業力向上に努めた。 また、クラスルー ムを活用すること で、日常的に職員 同士が授業改善に 関する取組を振り 返ったり共有して 、職員同士で日々 、学び合うことが できた。 □1週間のチャレ ンジタイムの内容を 修正したり、学力 に課題のある学年 において、習熟度 に分けて学力補充 を行ったりする等 、児童の学びに応 じて学習活動を工 夫することができ た。 ◎学校生活アンケ ートの肯定的評価 は、88%であ った。 ◎学期末到達率(知 識・技能)80点以 上の割合は、国 語73%、算数69 %であった。	3	3	3	○学力向上に向け て、研修や日常的 に職員同士が学び 合う場をさらに充 実させることで、 授業力向上を図 る。また、学校課 題を踏まえて来年 度のチャレンジタイ ムや家庭学習につ いて検討する。 ○学校全体で、授 業づくりポートフォ リオの成果と課題 を共有し、効果的 な手立てや支援に ついて検討し、授 業改善に活かして いきたい。
2	互いを認め合 える豊かな心 を育成する。	★	継 続	多様な人間関 係の中で様々な 価値観に触れる ことができるよ うに、多様な集 団での活動の場 を設定し、調整力 ・自己表現力を 高める。	縦割り班活動 や、1・6ペアな どのグルーピン グを行ったり、児 童会を中心とし て代表委員会を 運営したり、縦割 り班・登校班で の集会を設けたり しながら、組織 的な動きの中で 自己の役割を果 たす。	・グループや班で 活動するとき、み んなと話し合うこ とを通して、より よい方法を考える ことができた。 80%以上 ・グループや班で 活動するときや集 会で、自分の意見 をみんなに伝える ことができた。 80%以上	□縦割り班掃除を行 ったり、「1年生を迎 える会」の全校で レクを行ったり、 行事の時には代表 委員会でスローガ ンのキーワードを 各学級に意見を募 集したりすることで 、異学年交流やグ ループや班での話 し合い活動の場を 設けた。児童アン ケート「グループ や班で活動する とき、みんなと話 し合うことを通 して…」の肯定的 評価は	3	3	○児童会を中心と した、月間生活目 標を設定する。9 月については「あ いさつ」に設定し 、他学年にもあい さつする機会を設 けられるような企 画を実施する。(あ いさつBINGO) ○集会活動で、委 員会の発表の場を 設ける	□児童会を中心とし て「あいさつBING O」を実施し、意 図的に学級の仲間 、異学年や教員に あいさつをする機 会を設けた。また 、月間生活目標を 各学級の課題に 合わせて設定する 月間をつくった。 よかったクラスを 表彰するなどして 、全体に良さを 知らせたり広げ たりした。以上の ような取組を通 して、学級学年を 超えて、様々な 価値観に触れる 機会を設ける	3	4	4	○大規模校だから こそ、多様な児童 がいる。全児童が どんな児童でも 受け入れられる ような心の豊か さをもてるよう 、特別活動の視 点も取り入れて いく。

							88.3%であった。 □児童朝会で各委員会からの発表を募ったり、各月の朝会発表の担当を割り当てたりし、自分の意見を発信する場を設けた。児童アンケート「グループや班で活動するときや集会で…」の肯定的評価は 81.8%であった。			け、児童一人一人が意見の発言を通して自己表現できる場を引き続き設定していく。	ことができた。 □2学期に引き続き、児童朝会で各委員会からの発表を募ったり、各月の朝会発表の担当を割り当てたりし、自分の意見を発信する場を設けた。たくさんの活動の場を設けることで、本番だけでなく練習も含めて、調整力・自己表現力を高める場を増やすことができた。 ◎児童アンケート「グループや班で活動するとき、みんなと話し合うことを通して…」の肯定的評価は 89.6%であった。 ◎児童アンケート「グループや班で活動するときや集会で…」の肯定的評価は 81.2%であった。				
2	自分の生活習慣を整え、たくましい心と体を育成する。	★	継続	バランスの良い食事・十分な睡眠・デジタル端末の利用などの生活習慣を見直し、健康への意識を高める。 自分の体力を知り、運動量を増やして、体力向上に向けて運動意欲を高める。	定期的に食事・睡眠・デジタル端末の利用を意識して過ごしているか自己チェックを行い、それぞれの生活習慣を高めることの良さを児童や保護者に発信していく。 自身のもつ体力を知るために新体力テストを全学年全種目行い、1年間で特に身に付けたい体力要素を高められる運動をする。	・規則正しい生活習慣（食事・睡眠・デジタル機器の利用）を意識して過ごすことができた。 80%以上 ・運動を楽しみながら体力を高めることができた。 85%以上	□全校朝会で睡眠やバランスの良い食生活について委員会児童の発表の機会を設けたり、生活習慣の振り返りカードや夏休みの生活に「7つの目標」を活用したりすることで、「規則正しい生活習慣（食事・睡眠・デジタル機器の利用）を意識して過ごすことができた」児童は85.9%であった。 □発達段階に応じて家庭学習に体力づくりを出したり、夏休みの課題に楽しんで運動に取り組めるカードを出したりするなどして、「運動を楽しみながら体力を高めることができた」児童は88.9%であった。	3	3	○健康については、月に一度の振り返りは継続しつつ、感染症の予防やデジタル端末の適切な利用について、保健委員会の児童が朝会で啓発する機会を設けたり、2学期初めに「7つの目標」を再配布し、保護者に向けた働きかけをしたりしていく。 ○家庭学習は継続しつつ、体育の授業の準備運動の中に、1年間で特に身に付けたい体力要素を高められる運動を取り入れられたり、持久走や縄跳び運動の時期は朝休憩にグラウンドを開放したりするなど、運動量や運動する機会を増やす。	○食事・睡眠・デジタル端末の適切な利用について、朝会や保健便り・食育便りで児童や家庭に向けて啓発することができた。朝会では、保健委員会の児童が感染症予防について啓発活動を行ったり、毎月の生活の振り返りで自分の生活を振り返ったりすることができた。 □1年を通して、各学年に合った方法で家庭学習に体力づくりを取り入れた。また、冬休みにも本校の課題である敏捷性・瞬発力に関わる課題を出し、11～12月にはマラソン大会、1～2月には短縄記録会に向けて朝の時間に運動場を開放し体力向上の場をつくることができた。 ◎学校生活アンケートの体力づくりに関する肯定的評価は、85.9%であった。また、体力テスト再計測の結果、目標にした2種目のうち1種目以上記録が伸び	3	3	3	○学校行事と関連付けで児童が活躍できる場を作るなど、教師主ではなく、児童と共に体力の向上を目指したい。前期児童会が体力づくりを公約に掲げていることから、保健委員会・体育委員会・給食委員会だけでなく、児童会の今月の目標などにも運動を取り入れていけないかと考えている。 ○規則正しい生活習慣については、毎月の生活の振り返りを継続し、児童が自分の生活について考える機会を作ることは継続しつつ、デジタル端末の利用については幸千中学校区と連携してデジタルコントロールを実施する。

[illegible]

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。